

令和5年6月30日

TEL・FAX 0954-66-3113

発行責任者 江口 常雄

き ず な

す けん き みどり さと おお くさ の
住 み よ い 元 気 な 緑 の 郷 大 草 野

天気も上々！ 田植え体験学習 できました！

自分が植えた田んぼの美味しいご飯が食べたい！ 6月15日（木）

大草野小学校の子どもたちの行事の日は、ほほいい天気になります。先日の芋さしだけが延期になりましたが、本日、梅雨の半ばにしては良過ぎでしょう！

5年生は、現在学年別では一番の大所帯、2班に分かれても、1列につき4、5回ずつくらい植えるくらいのスペースしかありません

でした。

今年の5年生は、掛け声を自発的にやってくれた子がいい仕事をしてくれました、みんな

に声が出て、グッジョブ！でした。始まる前に田植え用の足袋を履くのに悪戦苦闘している児童が毎年います。今回、田植え足袋を履くのを手伝いましたが、足首からかかどにかけての部分の部分が固く作られていて、少し足が大きい子は履きにくそうでした。子どもたちにしてみれば、安全でありさえすれば、裸足が一番色々な体験になっていいのかもしれないね。いよいよ田植えが始まって、これも毎年のことですが、最初の2、3列を見ていると、「いつまでかかるのかな？」と心配になりますが、それを過ぎると次第にうまくなっ



ただいま3列目、始まったばかり！

いきます。気持ちにゆとりもできたのか、「おいしくなあれ、おいしくなあれ、萌え萌え、キュンキュン！」という掛け声も始まって、クラスみんなの仲の良さまで伝わってきました。今年の田植えチャンピオンは、右の

写真の2人です。最初の班では小濱優来さん、2班では福田倫斗さん。この2人は最初から迷いもなく手が動き、プロフェッショナルな感じでした。2人も、グッジョブ！



今年の田植えチャンピオン
小濱優来さんと福田倫斗さん

ホタルが乱舞する姿を見たい！

4年生15名が幼虫を放流（6月20日：火曜日）



無事に育って蛍になあれ！

私が事務局になって4年目ですが、今日が一番の晴天になり、気温もずいぶん上がってきました。やぶ蚊がたくさん飛来したので、「子ども達は半そで半ズボンやつぎ蚊に食われるっばい！」と言って、蚊取り線香や虫よけスプレーを取りに帰ったりして、大草野コミュニティのG達は優しいでしょ？

最初は恐る恐る人工小川を見ていた子ども達も、慣れてきたら、小川の中をじーっと覗き込んで、カワニナや蛍の卵がないか一生懸命に探していました。



蛍の幼虫と幼虫のエサになる川ニナを放流し終わって帰るころは、

まだ遊びたいようで、サワガニやバッタなどを探している子もいました。今年は蛍の飛ぶ姿を見られたようですが、鑑賞会の時間は取れずに終わりました。以前と同じように、大人も子どもも、一緒になってホタルの観賞会が出来たらいいと思います。そのための環境整備ができればいいと思っています。

<生態学習> 蛍の幼虫観察 顕微鏡の中にエイリアン？！

毎年のことですが、ホタルの幼虫を顕微鏡にセットするのは、なかなか難しく、思うようにいきません。

生きた状態を見せるためにガラスに挟まないでレンズの上に置くと、幼虫が動き回り、タイミングを考えて顕微鏡を覗き込まなければなりません。子ども達に、エイリアンの姿を見せるのは毎回大変です！

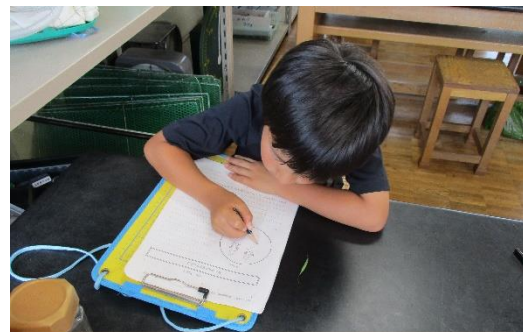
「ギャッ！！」と、言う男子がいるかと思えば、女子が「カワイイ！！」と言ったりで、最近は、色々な場面で子ども達の多様性を垣間見ることが



卵から蛍になるまでを聞き入っています。

ことができます。黒い小さなゴミにしか見えない幼虫が、顕微鏡を覗くと、ムカデに毛の生えたような生き物がうごめいています。

子ども達は、講師の一ノ瀬顧問のホタルの生涯についての話を、行儀よく静かに聞いていましたが、一生のうちのほとんどを水中で過ごし、きれいな光を放って飛び回るのが10日から2週間だと聞いて、「ホタルの一生」についてどんな感情を持ったでしょうか？



幼虫の絵が上手な志田陽翔さんです！

先日、六一才でパーキンソン病を患っていた職場の後輩が亡くなりました。そんなに病気が進行しているとは思っていませんでした。後でゆっくり語り合うこともあるだろう、と暢気に構えていたことを反省しています。

彼の病気が判明したのは合併直前の平成一七年頃。合併後も勤めていましたが、病気が進行して早期退職をいたしました。彼は、いわゆる細マッチョで、痩身でも腕力は強く、脚力もあり、野球やソフトボールでは、大飛球を放っていました。家が大茶樹の近くだったので、その大飛球には「大茶樹返し」という異名までありました。

私がまだ二〇代の頃、私の発案で仲間を集め、役員職員の親交のために日の出から日没までのソフトボールを行いました。彼ひとりだけ一度も休まず全インングずつと出場したタフガイでもありました。温厚で誠実、仕事も熱心で間違いがなく、誰からも信用され愛される人物でした。そんな彼がこんなに早くいなくなるとは…。

通夜の夜、奥さんから「江口さんと絵のお話をしたがついていました。」と聞いたとき、何とも申し訳ない感情が湧いてきて、それからずっと心の隅に後悔が居座っています。合掌

〈編集後記〉

「惜別」